

エキゾチック動物の臨床現場から

田向健一[†] (田園調布動物病院院長)

本誌を読まれる多くの獣医師がそうであるように、私も例にもれず幼少期から動物が好きで自宅で犬や猫を飼っていた。また、愛読書は動物図鑑で、学校では「昆虫少年」「動物博士」と呼ばれ、小学校ではもちろん飼育委員を自ら希望してウサギやニワトリの世話を好んで行った。そして、中学生になったときにお年玉を貯めて熱帯魚を飼い始め、またその延長で爬虫類や両生類も飼育するようになっていった。

そうした経緯を経て獣医師を目指したので、自分の中では、犬猫とエキゾチック動物との明確な境界線がなく、学生時代より双方をバランスよく診療できる病院を作りたいと考えていた。バランスよくという意味は、犬猫に限らずエキゾチック動物においても日本の獣医療技術水準の7~8割程度を目標にするということである。したがって、開院当初はエキゾチック臨床の専門になる、という明確な目標はなく、むしろ町のジェネラリストとしてあらゆる動物を診ていきたいと思っていた。

結果的に病院ホームページの影響や地元獣医師会の動物病院の紹介があつてウサギやカメなどのエキゾチックの症例が増え、もともと好きだったエキゾチック動物診療の道を追究するようになった。開業して今年で12年になるが、現在では、獣医師対象の雑誌や書籍の翻訳、セミナーのほかに、一般向けのペットのイベントなどで獣医師の仕事を紹介したり病気に関する講演、一般向けの飼育書の執筆や監修の依頼も幅広く受けるようになった。

エキゾチック動物を病院に連れてくる飼い主は、飼育して日が浅く、動物を飼ったことがないような初心者か、もしくは、インターネット等を駆使して情報収集に余念がない、とても熱心に勉強されているマニアであり、どちらにしても獣医師側からするとなかなか“手強い”飼い主が多い。私は、知り合いの獣医師から「エキゾチックの飼い主さん相手によく続いているよね」とたびたび言われる。しかし、これは裏を返すと、飼い主に動物の飼い方や病気の知識を親身に説明し、正しく理解いただくことにより、飼い主は、その獣医師を信頼し通い続ける傾向があるということであろう。これは、何もエキゾチックの飼い主に限ったことではなく、犬や猫でも同じことが言えるかもしれない。難しい病気や慢性疾患などになった犬猫で転院を繰り返す飼い主も多いが、

多少時間がかかっても理解しやすい説明を尽くせば、素直に耳を傾けてくれるものである。

私事になるが、臨床で得た経験を獣医学に貢献できればとの思いで、昨年、母校麻布大学に学位論文を提出し学位を取得することができた。テーマはカエルツボカビ (*Batrachochytrium dendrobatidis*) である。2008年頃、日本のカエルが絶滅するかもしれないと新聞やテレビでも大きく取り上げられたが、両生類に感染しツボカビ症を引き起こし、オーストラリア、パナマの熱帯雨林に生息する両生類の一部を絶滅に追いやった真菌の一種である。国際獣疫事務局 (OIE) は狂犬病や口蹄疫などと並ぶ監視すべき病原体としてリストアップしている。カエルツボカビがアジア圏で最初に検出されたのは日本であり、その症例第1号は実は当院の患者からであった。ペットとして飼われていた外国産カエルが原因不明の体調不良で当院に来院し、対症療法の甲斐なく次々と死亡した。麻布大学病理学研究室へそのカエルの病性鑑定を依頼したところ、この悪名高きカエルツボカビが発見された。その経過は宇根有美教授が発表された (Dis Aquat Org, 82, 157-160 (2008))。これをきっかけにアジア各国でカエルツボカビ研究が始まった。私はその後、臨床で遭遇した自然発生性ツボカビ症症例を用いて抗真菌剤による治療プロトコルを開発し学術誌に発表した (J Vet Med Sci, 73, 155-159 (2011))。さらに、ペットとして輸入された両生類及び患者として当院に来院した両生類、計820匹のカエルツボカビの感染率及びその遺伝子型を調査した (Dis Aquat Org, 109, 165-175 (2014))。カエル

田向健一

—略歴—

1998年 麻布大学卒業
同年 動物病院勤務
2003年 田園調布動物病院開業
現在に至る

2014年 学位 (獣医学) 取得
2015年 麻布大学病理学研究室共同研究員



[†] 連絡責任者：田向健一 (田園調布動物病院)

ツボカビの由来に関し、それまで南アフリカ起源説が唱えられていたが、欧米、アジア諸国の先進的な遺伝学的解析から、実は起源はアジアらしいこと、また、世界各地で猛威をふるったカエルツボカビだが、アジアでは野生の両生類の死亡事例がみられないこと、日本を含むアジアに生息する両生類はカエルツボカビに対して耐性を持ち、影響を受けない可能性が強く示唆された。このように町の動物病院に来院した1匹のカエルが、その後の世界のカエルツボカビ研究に一石を投じることになった。この経験を通じて、小さなクリニックにおける臨床においても未知の症例や新規の事例に出会える面白さを

実感することとなった。

動物病院内で臨床獣医師がすべき事項は非常に多岐にわたり、どこまでも広大で終わりが見えない。30歳で開業し、今まで12年間、何にも取り組んでみよう、挑戦してみようという気持ちで暗中を走ってきたが40歳を過ぎて、ようやく自分が目標とすべき獣医師像、獣医療の姿が見えてきた。まるで、深い霧がようやく晴れて目指すべき山の頂が現れたように感じている。たくさん背負い込んだ余分な装備や気負いを捨て、これからは、身軽になって自分らしいスタイルで獣医臨床を追究していきたい。